



「あのちよつと
お話があるんですけれど」

一色いろはは
生徒会長であり
奉仕部に入入りして
いる女の子だ。



「さ…最近雪乃先輩や
結衣先輩とやたら
親しいですよね…?」

「一体どんな
関係ですか…?」

いろはは真剣なまなざしで
こちらをにらみつけてきた。

「なんでそんなことを
訊くんだ……？」

「そんなの
決まってるじゃないですか……」

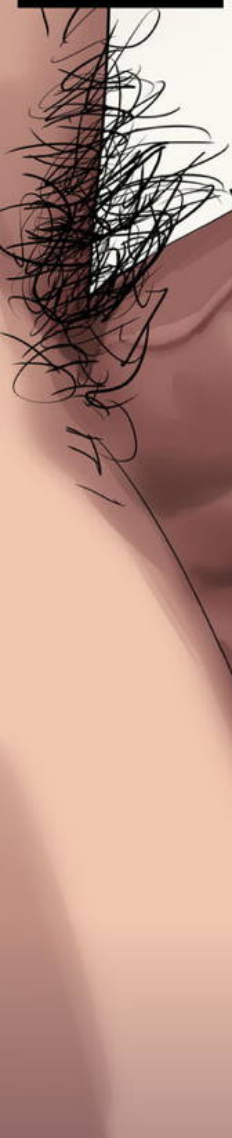
いろはは
俺の返事を聞かず
しゃがみこんだ。



「チンポに
訊くんですよ♡」

はむい

いろははもうすでに
俺の催眠にはまっていた。



「はむ…れる…
ぢゆう♡やたら
くっさい千ンポですネ♡」

「これだけ臭うってことは
使っていないってことだし
もしかしたら白かも…」

あーん

ぢゆうる
ぢゆうる

あーん
あーん



「いろはちゃん
フェラチオじゃなくても
もつと別の方法で良かったんじや
ないの？」

「何いってるんですか
男性の本音は精液に
あるんですよ♡
しらないんですか？」

いろはへの催眠は
どんどん強まり、
深みに落ちていく。



「いいからちゃんさんと
射精してください♡
溜めてるんでしょ♡」

♡♡♡
かほ♡

♡
かほ♡

「そこまで

いうならいるはちゃん

ちゃんと俺の精液受け止めてね」

かほ♡

♡
かほ♡

「射精すぞっ!!」



どぴゅっ♡びゅく
びゅるんっ♡
どぶっ♡ぶっ♡ん♡

どぶっ♡

どぶっ♡

どぶっ♡

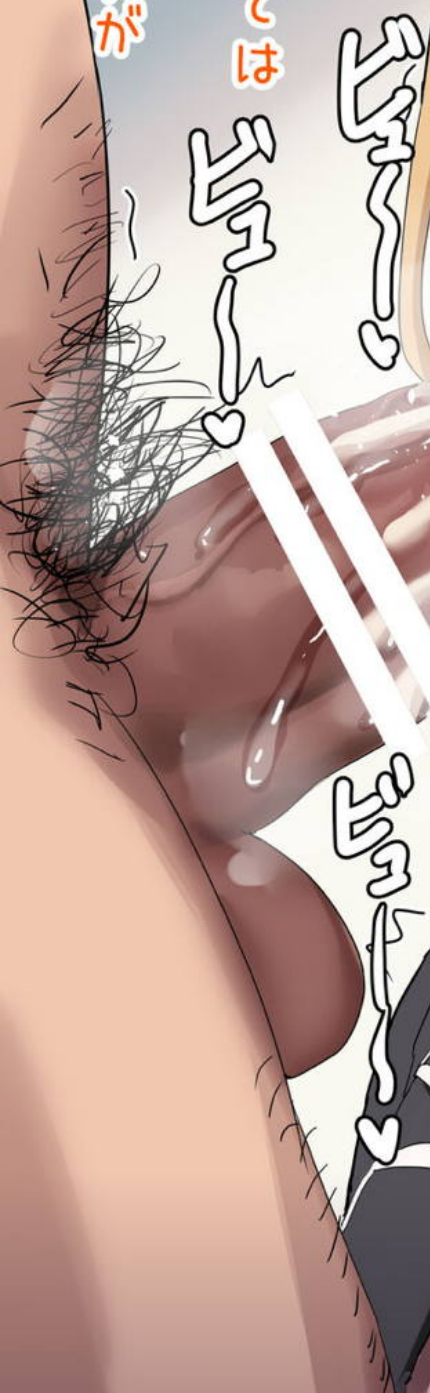
どぶっ♡

どぶっ♡

どぶっ♡

「どういゝろはちやん
俺と奉仕部との
関係がわかつた？」

「うう…まだフェラだけでは
わかりませんね…♡
これはもつと調べる必要が
ありそうです♡」



いつものヤリ部屋へと
いろはを連れ込み、
まぐわう。

処女喪失の痛みを
そのまま快樂に
催眠アプリで変換してやった。



「どうしたの
いろはちゃん
やけに反応が渋いけど」

アッ

「思ったたよりも
あなたのチンポが
大きくてですね…❤️」



ビュッ

ビュッ

ビュッ

アッ

ビュッ

「もっとなちゃん
根元までいかないと」

「んんん」

「んんん」

「チンポのことは
わからないよ!」

「ちよっと待っ...♡
待ってくださーい♡」

「んんん
ななな」

「んんん
ななな」

「んんん
ななな」



「奥に行ってるのわかる？
いろはちゃん？」

ジュン

ジュン

ジュン

ジュン

ジュン

ジュン

ジュン

ジュン

「やだ♡
まっってください♡
こんなの知らない♡♡♡」

ジュン



俺はいろはの
快樂度をあげてやる。
いのはから
あきらかに余裕がなくなった。





「とんじやう♡
とんじやうからあ♡」

「あっ♡はっ♡
やっ♡」

「いろはちゃんの
初めての初まんこ
種付けいくよ!」



お風呂お風呂

お風呂

お風呂

お風呂

お風呂

お風呂

「種付けイキの
反応が初々しくていいね」

「はあっ……♡
あっ……♡
温かいのまだ
射精てる……♡」

放心したいろはを
俺のものにすべく
腰をしっかりとつかんだ。



「えっ……♡」

俺は
催眠アプリの
リミッターを
解除した……！



「あぐっ♡ううっ♡
なに……これ……♡♡♡」

おっぱい

おっぱい

おっぱい

いるのは身体に
体験したしたことのない
快楽が駆け巡る



とめどない快樂が
いろはの脳へと至る。

ガクッ

「これが
本当のセックスだっ！」

「あがっ♡
はっ♡苦しい♡」

ガクッ

あ

あ

あ

あ



カクッ

「あっ♡やば♡
これ深いっ♡♡♡」

おん

おん

カクッ

「それじゃあ

ラストスパートいくぞっ!」

おん

おん



結構野太いオホ声だねw

「いるはちゃんって





「オラっ!!
マジイキさせてやるぞ
いるはっ!
天国に連れてってやるからなっ!!」

「イグウっ♡イグっ♡
イグイググウツ♡♡♡
あっ♡あ♡あ♡あ♡あ♡」

10-10-10-10-10-10-10-10-10-10

「あつ…ふう…
こんなに射精したの
久々かも」

「やっぱり
初物まんこは
最高だな…」



ドアが開く。

雪乃「……!! 貴方一体何を……!!」
結衣「いるはちゃん」

二人は驚愕した
表情でこちらを
凝視していた。



「4人で乱交するぞ
さっさと服を脱げ…!!」

ヒッ
ヒッ

ヒッ
ヒッ

は
い
は
い

ひ
ひ

終



















































